

---

# さらば いとしの大魔王先生！

noracroix

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さらば いとしの大魔王先生！

### 【Nコード】

N4861V

### 【作者名】

noracroix

### 【あらすじ】

なぜか大魔王が学校で教師をしている。

そんな大魔王先生を子供たちは恐れることなく慕っている。

恒例の大魔王ネタで盛り上がった後、授業を始めようとしたその時、女の子が遅刻して教室に入ってきた。

女の子の手にはこん棒が握られていた。

クラスの人気者だったはずの少女、その様子が何かおかしい。

一体、少女に何が起きたのか！？

三題嚙で創作に挑戦。

今回の題目は『こん棒』

『グラウンド』

『闇』です。

五年四組の教室。

これから一時間目の授業が始まる時間。

「それでは皆さん、始めますよ」

教壇に立つ一人の教師、歳は二十代かせいぜい三十代くらいまでに見える。

「先生、ちょっといいですか？」

授業はまだこれから、黒板にも何も書かれていないのに、一人の男子が挙手をして発言を求めている。

「ハイ、どうぞ山田くん」

男の子は、ガタツと席を立って元気な声を出して言った。

「先生、どうしての先生の頭には、角がついているんですか？」

どこの学校に頭に角をつけて授業する教師がいるというのか、コスプレイヤーでもあるまいに。

「それはね……授業をする時みんなに注目してもらおう為だよ」

ズコツ。居た、ここに。

頭の脇から角を伸ばし、途中で直角に上へと曲がった二本の角をつけた教師がここに。

「先生、わたしも質問いいですか？」

今度は女の子が手を上げた。

「どうぞ、佐々木さん」

女の子もその場に立って質問する。

「どうして先生の瞳は、そんなに真っ赤な色をしているんですか？  
いやいやまさか、それは白目が充血してるだけに決まっている……」

「それはね、キミたち生徒をどんな暗闇の中でも赤く光る瞳で探せるようにだよ」

赤外線カメラじゃあるまいし……って、本当に黒目であるところ

が真っ赤にたぎる血の色をしてる。きつとカラーコンタクトに違いない、と言いたいが……フラッシュを焚いて写真を撮ったときに、コンタクトが反射して光るみたいに教師の目も光っている。

「じゃーあ、尖がった尻尾はなんであるんですか？」

別の子が手も上げず、席に座ったまま言った。

「それはね……」

ごくろり……、クラスの生徒たちもかたずを飲んで聞いている。

「わたしが……怖……い怖……い大魔王だからさ……！」

まさかまさか、きつと精巧にできたアクセサリーかなんかだろ……って、身体の一部みたいにクネクネ尻尾が動いている。先の尖がった黒い尾っぽが、おもちゃでは再現できない自然な動きで、その存在感を示している。

「さ……て、最初の生贄になりたいやつはどいつだ……？」

教師の身体から紫色のオーラが立ち上る。

教室全体を不穏な空気が包み込んだ。

「きゃあ……ッ」「こっわ……い」「ひー、殺さないでえ」「誰か助けてえ……」

教室のあちこちから悲鳴が上がる。

隣の友達と抱き合って叫ぶ女の子。

机の上に登って頭を抱えて悶える男の子。

机と机の間をぬって、ぐるぐる走り回るもの。

教室の中はまさに大混乱。

「は……い、静かに」

教師がパンパンと手を叩き、子供たちを鎮める。

「えー、もう終わり……？」

「もっかいやろーよ、せんせー」

誰にも手がつけれなさそうだった教室が、手を叩いたのを合図に秩序を取り戻した。

ブーブー言いながらも、大人しく席に着く子供たち。

これは毎朝の恒例行事のようなもの。

教師の正体は大魔王ダイーク。正真正銘の大魔王である。  
なぜ大魔王がこんな教師の真似事をしているのか。  
それは遡ること一ヶ月ほど前。

RPG好きの校長がいつものように校長室でゲームをしていると、いきなり画面がまばゆい光を放ち、このダイークが画面の中から現れた。

なにやら大魔王には事情があるらしい、校長が親身になって話を訊くと、ダイークはゲーム製作者に祀り上げられて魔王になっただけで、本当は人のためになることをしたかったのだという。だから、村人を苦しめたり、勇者に魔物を差し向けたりすることが嫌になり、ゲームの世界から抜け出したのだと。

彼の話に心を打たれた校長は、ゲームの世界に戻る必要はない、これ以上ゲームは続けない、そしてこの学校で教師をやらないかと誘った。

ダイークにとっても願ってもない話で、交渉はすぐに成立。  
今は校長の家に下宿をしながら、学校で教鞭を握る生活となった。  
そうダイークはゲーム世界から現れた大魔王だったのだ。

ゲームの設定では一億とんで二十九歳。

一応この世界向けに、大間 おおま おう 惶 おま という名前を名乗ることにした。  
校長のセンスでつけた名前である。

「それじゃあ、教科書三十五ページを開いてください」  
やっと教室は落ち着き、少し遅れて授業が始まる。

毎朝このくだりをやっておかないと、子供たちが授業に集中してくれないのだ。

教科書の内容をコツコツと黒板に書き写して授業をする大魔王と、ノートを取りつつ小さな声でこそそそお喋りをする子供たち。いつもの風景。

その日常を壊す音が、間もなくやってくる。  
ガラガラガラッ。

授業中にも関わらず、教室の後ろの戸から入ってくる一人の少女。

「どうしました桜井さん。遅刻ですよ」

少女の名は桜井さくら。このクラスの生徒の一人である。いつもは真面目で遅刻などしないさくら。

明るく優しい性格で、男子からも女子からも人気がある。

正面からみて左の方へ髪をまとめ、サイドでポニーテールを作る髪型。

どこのクラスにも一人はいる人気者。

「スイマセーン、先生。チョット田ンボのアゼ道が渋滞シテタモノデスカラ」

そういつて教室の中を歩き、さくらは自分の席へと向かう。

先の方が太くなっている棒を手にとって、先端をゴリゴリ引きずって歩いている。

「何持つてるんですか？ 学校には授業に関係ないものは持つてきてはいけないですよ」

「コレ八何ノ変哲モナイ、タダのコン棒デス。道端ニ落ちテタノデ、拾ッテキチャイマシタ」

「勝手に拾ってきては駄目です。今日はもうしょうがないですから、帰りに元の場所に戻してきなさい」

「ハーン、ワカリマシタ先生」

こん棒以外には、さくらに何の疑問も持たず平然と会話を交わす大魔王。

しかし、クラスの子供たちは、さくらの異様な雰囲気を感じとっていた。

そもそも、喋り方がおかしい。機械的というか感情がこもってないというか、とにかくいつものさくらの喋り方ではない。それに、遅刻の理由もアレはないだろう。

そして、表情も変だ。視線がどこを見ているのか分からないし、普段は笑ったりして愛想を振りまくのに、今日は表情にあまり変化がない。

さくらに一体なにが起きたのだと、クラス中の視線が集まった。

そんな周囲の視線を気にすることなく、さくらは席についた。机の横にこん棒を立てかけ、背筋をきれいに伸ばし、教科書を持つ手もきれいな形をしていて姿勢がよい。

真面目な態度のさくらに安心して、大魔王は普段どおりに授業を進めた。

子供たちはみんな思ったことだろう『先生、さくらちゃん、かなりヤバイですよ』と。

普段なら休み時間はさくらの周りに色んな子が集まる。しかし、今日はさくらを気味悪がって、誰も近寄ろうとしなかった。

そして、翌日。

「駄目ですよ桜井さん。昨日、そのこん棒を元の場所に戻すって約束しましたよね」

道端で拾ったというこん棒を、今日も持ち歩いて学校に来たさくら。

「ダツテエ先生、エリザベえゝすが独りニナルノが寂シイッテ言ウンデス」

「なんですか？ エリザベえゝすって」

「エリザベえゝすはエリザベえゝすデス。コノ子の名前デスヨオ」

「こん棒に名前なんか付けたんですか？ とにかく、約束が守れないのであればこれは先生が預かります」

大魔王はこん棒を取り上げようとした。

必死にこん棒にしがみついて、渡そうとしないさくら。

「イヤイヤイヤイヤ、先生エリザベえゝすをドウスル気デスカ？」

モシカシテ、保健所に持つティッテ処分スル気デスカ？」

「何言っているんですか桜井さん。こん棒を保健所になんか持っていったりしませんよ。保健所は動物さんたちを保護する所です」

さくらの抵抗が強く、なかなかこん棒を奪う事ができない。

「エリザベえゝすは生キテイルンデス、独リジャ寂シインデス、エリザベえゝすを連レテ、連レテイカナイデーーーーー」  
「ッ！」



小学五年生の女の子のどこに、こんな力があるのが。大魔王が本気をこん棒を取ろうとしても、さくらから引き離すことができなかった。

「はあはあ……はあはあ……もう、しかたがないですね。とにかく、こん棒は危ないですから、絶対に振り回したりとかしては駄目ですからね。それと、なるべく早く返してくるんですよ。いいですか？」

「ハイ先生、アリガトウゴザイマース」

もういい加減あきらめ、こん棒を取り上げるのは止めることにした。放っておけばその内飽きて捨てるだろうと、その時は考えていた。

それから何日も、何日経ってもさくらは飽きることなくこん棒を持ち歩いている。常に身肌離さず、音楽室へ行くときも、体育館へ行くときも、トイレへ行くときも手にしっかりと持っていた。

次第にその光景が普通になってきて、気にするものは減っていた。

初めはさくらから距離を置いていたクラスメイトたちも次第に今のさくらに慣れ、休み時間になれば話しかけるようになっていた。

「ねえ、さくらちゃん。なんでエリザベスって名前なの？」

休み時間、さくらの周りに二、三人の女の子が集まってお喋りをしている。

「ダツテエ、コノ子カアイイジャナイ？ ミンナの前ダト恥ズカシ

ガツテ喋ラナイケド、二人ダケノ時はワタシと才喋リスルンダヨ。

モオスツゴクカアイインダカラ」

「へえ、そうなんだ。わたしも喋つてるとこ見てみたいなあ」

相変わらず言っていることはおかしい。

普通の小学生なら、何日経ってもさくらのことを怖がって近寄らないのかもしれないが、このクラスには大魔王なるものもいる。

大魔王がいることに比べれば、こん棒を持ち歩くような少女が一人いたところで、大きな問題でないに違いない。このクラスの生徒たちは知らず知らずの内に、ちよつと変わった人に対する免疫が備

わっていた。

非日常が日常になっていた、ある日の朝。

空は曇り模様で外では雨がしとくと降っている。

時折空が光る、遠くの方で雷が鳴っているようだ。

五年四組の教室。出席確認をする大魔王。

「あれ、今日は桜井さんお休みですか。誰か連絡をもらっている人とかいませんか？」

こん棒を初めて持ってきた日以外は、遅刻せずに学校に来ていたさくらの姿が今日はない。

「聞いていませーん」「わたしもー」

誰もさくらのことを知らない。

「まったく……また変なものとか拾ってこなければよいですが」

出席確認が終わり、授業が始まる。

毎朝恒例だった大魔王ネタも、さくらがああなっから忘れ去られている。

一時間目の授業も終わりに近づいてきたころ、窓側の席に座っている子が窓にへばりついて外を凝視していた。

「何しているんですか、授業中ですよ前を向きなさい」

大魔王が注意しても、見るのを止めない。

そして、ぼつりと言った。

「ねえあれ、さくらちゃんじゃない？」

言った途端にクラスのみんなが窓側に集まった。

「え、嘘どこどこ？」「なんでさくらちゃんお外にいるの？」「え

ゝ、よく見えないよお」

ワイワイ言いながら、みんなでさくらの姿を探している。

「みんな席について、ついてゝゝ」

と言いながら、大魔王も窓の方へ寄っていった。

「ほら、あそこ、グラランドのところ。ちょっと遠くてよく見えないけど、さくらちゃんじゃない？ だってこん棒みたいなものの振り回して走ってるし」

初めに見つけた子がそう言って、他の子たちもさくららしき女の子をみつけた。

「あー、ほんとだ」「確かにあれさくらちゃんかも」「雨降ってるのになにしてるの?」

大魔王もさくらの姿を発見した。

彼の視力は10・0を軽く超える。伊達に赤く光ってはいない。

「確かにあれは桜井さんです。どうしたんでしょう、何か様子がおかしいですねえ」

様子が変わっていることにもっと早く気づけよッ、とクラスのみんなは心で思ったはずだ。

「こん棒が生きているように動いて見えます」

それを聞いて、子供たちも目を凝らしてみたが、やはり遠くてよく分からなかった。

「桜井さんはわたしが連れてきます。みなさんは席について静かに待っててください」

大魔王は子供たちを教室に残して、グラウンドへ向かった。

外では雨の降りが少し強くなった。

グラウンドには水溜りもできている。

誰もいないグラウンドをさくらが一人で駆け回る。

靴は防水加工のない普通のシューズ。靴も服もスカートもびちょ

びちょだ。

「ウヒッウヒッウヒヒヒヒ……ウヒッウヒッ」

さくらの可愛い顔が台無しになる、奇妙な声を発している。

顔も笑っているというより、イッチャッてる表情。

ビチャビチャ水溜りを弾きながら、大魔王が駆けてきた。

「さあ、桜井さん教室に行きましょう。雨に濡れたままだと風邪ひきますよ」

手を差し伸べ、さくらに近づく。

「ウヒャッウヒャヒャッ、アヒャッアヘッ」

変な声出しながら、さくらがこん棒を振り回し、大魔王に襲い掛

かる。

「止めてください。どうしたんですか、いつものあなたらしくありませんよ」

さくらの攻撃を紙一重でかわす。その表情には余裕がある。

流石は大魔王と言ったところか。

「いい加減にしないと怒りますよ」

さくらは怯まず攻撃を続ける。

こん棒を振りかぶりジャンプした。飛んだ高さは三メートルはある。

とても小学生の女の子の身のこなしではない。

大魔王は後ろへ飛び退け攻撃をかわした。

空振りしたこん棒が地面に叩きつけられる。

ドゴオオオオン　！

雷が落ちたような音。叩きつけられた地面に大きなくぼみが出来た。

「なかなかの威力……仕方ありません。少々痛いかもしれませんが我慢してください」

大魔王は腰に力を溜め、さくらへ向けて右手を伸ばし、気を集中させる。

「発ッ」

大魔王の右手から電撃のような光りが、さくらへ放たれた。

「ウギヤアアアアアアア　　クギユウウウ」

膝から崩れるさくら。ぷすぷすと焦げた匂いが漂う。

さくらは今の一撃で意識を失ったようだ。

「すいません、桜井さん。でも命に別状がないよう手加減してありますから」

ひとまず保健室へ連れて行って手当てをしなくては、さくらを身体を抱きかかえようと近づいた。

ドスッ！

強烈な一撃が大魔王の腹に打ち込まれた。

さくらが気絶していると油断があった。今もさくらは意識を取り戻しているようには見えない。しかし、さくらの腕が伸び、こん棒で腹を突かれている。

「油断しやがって、一発くれてやったぜ、フォ  
ッ」  
歡喜の雄叫びが上がる。

さくらの方からするがさくらの声ではない。比較的若い男のフアンキーな声。

大魔王は腹を押さえ、よろめきながら後ろへ下がった。

「ケホッケホッ……ゲホッ」

口から青色の血が吐き出される。

「くっ……貴方が桜井さんを操っていたのですね。一体、何者なんですか？」

こん棒の頭の方がぱっくりと開いた。ギザギザの歯があり、それは口だった。

「オレっちは、カリバーン。史上最強の伝説の武器だ覚えとけッ」

「まさか……あのRPGで勇者が装備できる、伝説の武器ですか？」

「まさしくその通り、大魔王倒しに遥々この世界まで来てやったんだ、感謝しな」

「エリザベスという名ではなかったのですか……」

「当たり前だっ！ その名前はこのガキが勝手つけたんだ。人が何度も教えたの全然覚えやがらねえで……」

「しかし、あれはもつと神聖で、美しく、精巧な武器のはず。それがなぜただの木の棒なんかに……」

「知りたいか？ どう……しても知りたいか？ そんなに知りたければ教えてやる」

「いえ、そんなには……」

「まあ、聞け。テメエがゲームをエスケープしたおかげで村は平和になった。勇者たちに差し向けられる魔物も居なくなっただけで戦う必要がなくなった。本来オレっちは勇者と共に戦い、大魔王のテメエを倒し、英雄の武器として奉られるはずだった。しかし、テメエが抜

けだしたショックでゲームはバグり、たまたま勇者が所持したアイテムのこん棒がオレっちに書き換えられちまった。カッコいいオレっちが、こんなダサい棒きれになり、奉られるどころか、7Gでアイテム屋に売られ、アイテム欄からも消えゲーム内での居場所が無くなった」

「そうだったのですか。それはお気の毒です」

「これもそれも全てお前のせいだ。オレは恨み、恨み、恨みつくし、気がついたときにはこっちの世界にいた。たまたま通りかかったガキに拾われ、こいつの心をじわじわ侵食し、オレっちの操り人形にやってたのよ」

「なるほど、わたしへの恨みで伝説の剣が呪われ、桜井さんに取り憑いていたというわけですか」

「そうよ、このガキの心を完全に闇へ堕とし、貴様と戦う機会を待っていたのさ」

「わたしを恨んでいることは分かりました。しかし、その子は関係ない。今すぐ開放しなさい」

「おれは武器だ。振るう者がいてこそその存在。このガキを放すわけにはいかねえなあ」

「ならば、貴方を破壊するまでです」

「出来るもんならな。テメエがガキを気絶させたおかげで完全にオレっちの思い通りよ」

大魔王の爪がぐんぐん伸びる。長さ三十センチほどになり、厚みもある。

「わたしの爪は鋼鉄より硬い、そして魔力を込めればダイヤモンドよりも硬くなる」

爪の周りに紫のオーラを纏った。

「へっ、上等だ！」

二人同時に飛びかかる。

こん棒と爪、二つがぶつかり合い火花が散った。

「流石にバグっても聖剣。魔力を込めた爪でへし折れないとは」

「デメエもなかなかやるじゃねえか」

一旦距離をとり、ジリτζリツと間合いをはかり、攻撃のタイミングを窺う。

こん棒に操られるさくら、可愛らしい小学生の女の子の足が、強烈に地面を踏み込んで、一気に間合いを詰め飛びこんでくる。

ブオンブオン大気唸らせ、激しく振り回されるこん棒。

それを紙一重でかわす大魔王。

続く激しいラツシュを爪で受け流し防ぎきる。

猛烈な連打に大魔王のバランスが一瞬崩れた。

「今だッ！」

さくらが身体がストンと落ち、しゃがんだ体勢で瞬速の回し蹴りを入れる。

「甘いです！」

大魔王は、すかさず後方へジャンプ。それをすんでの所で避ける。

「狙いは着地の瞬間！」

こん棒を振り構え、詰め寄った。

「だから、甘いと」

大魔王の背広が破れ、背中から翼が生える。

「な、なんだと!？」

「これでも大魔王の端くれです。翼の一つや二つ持ってますとも」

漆黒の翼。それを羽ばたかせ、空へと昇ってゆく。

「くそっ、逃げる気か!？ 卑怯者、降りてきやがれ！」

「言われなくても、すぐに降りていきますよ」

百メートルほど上昇したところで一旦そこに止まり、そして今度は前へ向かって羽ばたいた。少し勢いをつけたところで翼をたたみ、宙を滑空してスピードが加速する。

両手を伸ばし、爪を一つに重ね、真っ直ぐさくらへ向かって落ちてゆく。

「き、来やがれ！ 伝説の聖剣のオレっちが、魔王の爪ごときに負けるはずがねえ！」

**ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！**

爆風でグラウンドにあるサッカーゴールはふつとび、木々がなぎ

いまの一撃で雲も吹き飛ばされたのだろうか、上空に青空が広がって雨が止んでいた。

そこに立つ一人の影……大魔王の姿だ。

こん棒はさくらの手から離れ、先端からヒビが入っていた。

「言つたでしょ、これでも大魔王の端くれです。貴方ひとりで倒せる相手ではないですよ」

「くそっ……流石に大魔王の名は伊達じゃなかったか。勇者その他と四人パーティーでどうにか倒せるラスボス。オレっち一人では手に負えなかったか」

「さあ、観念してゲームの世界に戻りなさい」

「ま、まだ終わっちゃいねえ！」

おどろおどろしい黒い霧のようなものが、こん棒のヒビから噴き出てくる。

「それが呪いと化したあなたの正体ですか」

黒い霧が倒れるさくらの上でまとまり、小さな雲のような塊になる。

「貴様は教師。木の棒は破壊できても、可愛い生徒を傷つけることができるかな？」

「ま、待ちなさい！」

さくらの上に立ちこめた黒い雲が、鼻や口から吸い込まれて体内へ入ってゆく。

「桜井さんの身体から出なさい！ その子を盾にするつもりですか！？」



さくらの身体がガタガタ震え、暴れ悶える。

次の瞬間、震えがピタツと静止した。

頭を垂れ、手をブランと揺らし、ゆっくりと立ち上がった。

「ウヒヤヒヤッウヒヤッウヒヤッウヒヒヒッ」

さくらの声で不気味に笑う。

「イイ！ このガキの身体、棒つきれよりシツクリ馴染むぜツ！」

さくらの声だがさくらじゃない。

カリバーンはこん棒を捨て、完全にさくらの身体を乗っ取った。

「イクゼツ！」

カッと顔が前を向き、さくらの身体が猛烈なスピードで地を駆ける。

その速さはこん棒で操っていた時の比ではない。

さくらの手刀が大魔王に斬りかかる。

大魔王は避けるもかわしきれず、僅かにかすった。

服がスパツと切れ、その下の腕から血が流れる。

切られたという感覚など無かった、恐ろしいほどの切れ味。

「桜井さんの身体そのものが聖剣になったということですか……これは本気でヤバいかもしれませんね」

「その通り、こいつの身体は剣となった。ここからはオレっちのターンだ、貴様をギツチョンギツチョンに切り刻んでやる」

さくらの両の腕が乱舞する。

鞭のようにしなやかで、名刀のように鋭い。

さくらの手刀をガードする爪が、ボロボロに削られる。

「こ、この爪では防ぎきれませんか……」

受けきれなかった攻撃で、全身に切り傷が刻まれてゆく。

本気で攻撃すればなんとかなるかshれないが、さくらまで傷つけてしまう。

かといっていつまでも攻撃を受け続けられもしない。

防戦一方、ジリジリと押されていた。

その時、かかるとにコッソと何かが当たった。

「これはカリバーンのこん棒。こんなものでも魔力を込めれば、少しは攻撃を防ぐことができるか……」

大魔王は攻撃の隙をぬって、こん棒を拾い上げた。

そして、翼で羽ばたき後ろへ飛び、大きく距離をとった。

「そんな抜け殻をいまさら拾ってどうするつもりだ。オレが入っていないければただの棒つきれにすぎないぞ」

「分かってます。でも、試してみなければ分からないでしょう」

こん棒に集中し魔力を注ぐ。

闇のオーラがこん棒を包み、暗い輝きを放つ。

「そんなもの一撃で力チ割ってやる！」

さくらの右腕を指先までピンと伸ばし、力を凝縮させる。

左手で右肩を掴み、大魔王目指し突進した。

こん棒を構える大魔王、その手前でさくらの身体は高くジャンプする。

右腕を天高く掲げ、体重を全て乗せ、大魔王目がけ振り下ろした。こん棒で受ける大魔王。しかし、こん棒は攻撃に耐え切れなかった。

大魔王の攻撃で入ったヒビが更に深く入り、ついに真つ二つに割れてしまった。

「スツキリしたぜ、こんな弱っちい武器がオレっちだったなんてよ」

「やはり、耐えきれませんでしたか……」

その時、割れたこん棒の隙間から一筋の光が　。

突然それが大きな光を放ち、二人の身体が弾かれた。

割れたこん棒の破片は地面に落ち、その上で剣の形をした光の塊が浮いている。

悪の大魔王にも、呪われた聖剣にもない神秘の光だ。

「も、もしや……あれは真の聖剣エクスカリバー。形を持たないエナジーメタル」

「な、なに！　あのこん棒の中にもう一つの聖剣が入っていただとい？」

「悪をくじき、正義を守る。それが本物の聖剣……ならば」

大魔王は体勢を立て直し、傷だらけの身体を引きずってその剣を掴んだ。

「うつわああああああああ　　っ！」

強力な電流を体中に流されたような激痛が大魔王を襲った。

「へっ、馬鹿め。伝説の聖剣は勇者のみが扱える代物。魔王の貴様が持てば、逆にその身が滅ぼされるだけだぞ」

「わ……分かっていきます。ですが、わたしの可愛い教え子を救う為例え、この身が滅びようとも……桜井さんの身体は返して貰います」  
光の剣を握り、ふらふらになりながらさくらへ近づく。

「く、くるなあ！　い、いいのか？　このガキの身体ごと斬れてしまうぞ」

「これは光の聖剣……斬れるのは悪に堕ちた者だけです」

「ま、待て……オレが悪かった。この身体は出る、出て行くから許してくれ。許してくれ！」

「何度も言ったでしょ、これでもわたしは大魔王の端くれ。いままら許しを請うても許しませんッ！」

背を向け、逃げようとするさくらの身体。

光の剣をかざすと、光の筋が天まで伸びた。

逃げる背中に光の筋を振り下ろした。

「ヒッ、ヒャッハ　　ッ！」

呪われた聖剣。その断末魔の叫びが空まで響く。

やがて光の筋は収束し、そのまま消え去った。

伝説の聖剣を扱った大魔王の身体もボロボロになり、その場に力なく倒れ込んだ。

「う……う……ん……」

可愛らしい小学生の声。

さくらはむくりと起き上がった。

目を擦り、周りを見渡した。

倒れる大魔王の姿が目に見えなくなった。

「せ、先生！」

さくらは急いで駆け寄る。

「せんせい、せんせい。ねえ起きて、せんせい」

うつむきに倒れる大魔王の背中を、涙を浮かべながら揺すった。

もうさくらの声は呪われたカリバーンの声でも、こん棒を拾ってきたときの無感情だった声とも違う。もとの可愛らしい小学生の女の子の声に戻っていた。

「よ、よかった……元の桜井さんに戻れたんですね」

「うん、わたしもう平気だよ。先生のおかげだよー」

「桜井さん、いままでの記憶はありますか？」

「うん……なんとなくだけど。でもわたし、先生にひどい事しちゃったの覚えてる。わたし、先生の身体こんなボロボロにしちゃった。ごめんね先生、ごめんね」

「あなたのせいじゃありませんよ。あなたはただ身体を乗っ取られていただけですから……」

「でも……でも……でもお」

さくらの瞳から涙がボロボロとまらない。

手でぬぐってもぬぐってもどんどん溢れてくる。

「所詮、わたしはゲーム世界の大魔王。いつかは勇者に倒されるはずだった身。それが、自分の生徒を救うために死ねるなら。これほど幸せなことはありません」

「うそッ！　うそッ！　先生、死なないよね。また明日も授業してくれるよね」

「わたしの為にそんな涙を…… ありがとう桜井さん、教師冥利につきますね」

大魔王の身体が、薄く透けていく。

「やだ、まって先生、いや、いや、いやあぁ  
つ！」

少女の悲しみの悲鳴。

それに共鳴するかのうちに、真つ二つに割れたこん棒が輝きを示す。

その光は優しく、慈愛に満ちるような暖かい輝き。

「信じられない……あの木片がエクスカリバーの鞘だというのか」

「先生？ 鞘がどうしたの？」

「なんてことだ……大魔王のわたしにも、あの光が暖かく感じられる。大魔王ですら隔てなく、癒してくれると言うのか……」

「先生、わたし何かできることある？」

「持ってきてもらえませんか、あの光る木片を」

「あれを取ってくればいいのね。わかった、すぐ持ってくる」  
パタパタと走るさくら。

光る木片を胸に両腕で抱え、大魔王のところへ戻ってきた。

「はい、どうぞ、先生！」

「あ、ありがとうございます、桜井さん」

差し伸べられた木片を大魔王の手が触れた瞬間。

木片を包んでいた光が広がり、二人の身体を全て包み込んだ。

暖かい光。まるで宙に浮いているような、心も身体も全てが癒される感覚。

そう、まるで母親の子宮の中にいるような、きっとそんな感覚。

やがてさくらの身体の周りからは光はなくなり、大魔王だけを包み込んでいた。

「先生、すごいよ先生。身体が全然もう痛くないの」

さくらにあつた小さな傷も、汚れも全てなくなり。ボロボロになった服さえも元通りになっていた。

「先生、大丈夫……？」「早く、先生を保健室に連れていかなきゃ」

「先生、平気なの？」

教室の窓から見ていた五年四組の子供たちも、全員グラウンドに出てきて大魔王のところへ駆けつけにきた。

「みんな……わたしのことを心配して来てくれたのですか？」

「あつたり前だよ先生」「心配したよ……先生」「もうなんともないの、先生？」

「わたしはもう平気です。みなさん心配をかけてすいませんでした」

大魔王を取り囲む子供たち。

大魔王を包む光がいつそう強くなり、身体を宙に浮かせた。

「せんせー、なんなの、どうしたのこの光」

子供たちが心配そうな眼差しで見つめる。

「これは聖剣エクスカリバーの鞘の光。理想の世界へ導く光。どうやらわたしは元の世界へ帰らねばならないようです。わたしが抜け出してしまったことでゲーム世界はおかしくなっています。わたしはこの光の導きで元の世界へ戻り、ゲーム世界を元の正常な状態に戻し、元の理想的なゲームの世界にしなければなりません。今回の事件も元はと言えばわたしの責任、本来わたしはこの世界に居てはならない存在だったのです。ほんの短い間でしたが、みなさんの先生になれて幸せでしたよ」

「うそー、どうして、なんでー、行っちゃうの？ 先生！」

「やだよー先生。行かないでよ、先生が居なくなっちゃったら毎朝の楽しみがなくなっちゃうよ」

「ゲームの世界なんかほって置いて、ずっとわたしたちと一緒にいてよ」

「行っちゃヤダー、せんせー」

大魔王の瞳からしずくがぽたぽたと垂れる。

「みなさん、そんなにわたしを困らせないでください。本当にわたしはみなさんの先生になれて幸せです。思い出をくれて本当にありがとうございます」

光に包まれた大魔王の体が空へ登っていく。

光は薄く大きく広がり、まるで生徒たちを暖かく包み込むように膨らんだ。

大きくなった光はやがて霞んでゆき、大魔王の姿も一緒に無くなっていた。

「せんせー、ありがとうございます、そして、さよーなら」

グラウンドに響く、生徒たちの声。

生徒たちに見送られ大魔王は現実世界から消え、仮想現実の世界と戻っていった。

本来、現実世界に存在するはずのない大魔王。

それがゲーム世界から飛び出し、子供たちに勉強を教えていた。もしかしたら、それは全て幻だったのかもしれない。

だが、子供たちの心にはいつまでも存在し続けるだろう。

命がけで生徒を守った、大魔王先生の姿が永遠に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4861v/>

---

さらば いとしの大魔王先生！

2011年8月15日03時17分発行